

東与賀町史 東与賀町
 佐賀郡誌全(大正四年) 佐賀郡教育会
 佐賀県の歴史 城島・杉谷共著
 佐賀市史 上巻 末次 霧城 編
 佐賀市史 第三巻 佐賀市史編さん委員会
 佐賀県統計書
 川副町誌 川副町
 佐賀県における稲作技術の発展 県農業試験場
 クリークの農業生産に及ぼす影響調査 佐賀県
 佐賀農業の展開過程 鎌形 勲 著
 筑後川(その治水と利水) 国土開発調査会
 佐賀郡郷土資料 小柳 佐八 編
 東川副村誌(前・後編) 小柳 佐八 編
 日本古代稲作史雑考 安藤広太郎 著
 佐賀県農業史 山田 竜雄共著
 米つくり苦難の歩み 宮島昭二郎 著

九州の生業(農林業) 原田 角郎共著
 農業水利事業沿革 九州農政局
 佐賀平野の水と土 江口辰五郎 著
 日本歴史小辞典 竹内 理三 著
 日本民俗事典 大塚民俗学会編
 佐賀県百科辞典 佐賀新聞社
 諸富町農協創立三十周年のあゆみ 諸富町農協
 農薬ことはじめ 日本特殊農薬製造KK
 夕刊フクニチ、クリーク物語
 農機具 森 周六 著
 佐賀県稲作坪刈帳 早坂孝太郎 著

漁業史



有明海の海苔養殖風景

一 諸富町漁業のはじめ

古い記録では、宝暦三年（一七五三）、諫早湾の漁場をめぐり、諫早領と佐賀領との間で漁民の紛争があつて、佐賀藩の有明海漁民は連署の訴状を津方役所に提出したが、その中に浮盃新津、西寺井津、堤津の諸富町内の地名が記されている。

寛政年間の幕使佐賀巡見録によると、

漁師（漁師）は居り候やという質問に、ここより少し隔てた浮盃と申す所と、早津江と申す所に少し居りますと申すと、運上（租税）はと尋ねられ、ありませんと答えたが、重ねて尋ねられたので、左様答えると、結構なものだと仰せられたとするしてある。

また為重の庄屋は、光徳寺（西寺井）で聞かれた折、早津江と浮盃に約三十艘いると答え、帆別銀として三艘につき銀四匁五分を納めていると答えている。

浮盃と隣接している東寺井新名から、漁網のイワ（おもり、土垂）が庭・畠から多数出土しているが、中には手作りの、幼稚なものもある。

諸富町漁業のはじめ
ここらあたりは少し深く掘ると、かき（牡蠣）、ハイガイ、アサリなどの貝殻が出る、もとは海であった地区であ

る。

寛政四年（一七九二）作成の佐賀藩の絵図（寫しは町役場に保管）を見ると、浮盃本津の南面に展開する新地搦田があり、ナカボイ（現・大五川）があり、搦部落が現在と変わらず、一筋の道路に面して家々が描かれていて、浮盃新津と記入してある。

伊勢大神宮も記入されて、ちょうど、現在の搦部落の位置に当る。近隣の町村の古老たちは搦のことを「浮盃搦」あるいは「浮盃の搦」と称えるところから、浮盃新津即ち搦であるといえる。

妙光寺（為重）の過去帳から見ると、搦という名の部落の漁業は百年そこそこの歳月と思われるが、同地異名の浮盃新津という名の漁業部落は、前掲の宝暦三年には既に漁業が操業されていたことになり、少なくとも、二百年以上の漁業の歴史をもっていることになる。

さらに、搦部落の背後地で漁業が行なわれていたと考えたと、諸富町の漁業のはじまりは、なお古い歴史があると見ていいだろう。

二 諸富町漁業の特長

(一) 有明海の漁業

有明海は海面積が狭い割りに、筑後川、嘉瀬川、六角川、塩田川などの注入している河川が多いので、栄養塩類に富み、魚貝類の天然飼料が豊富なため、稚魚の育成に適している。

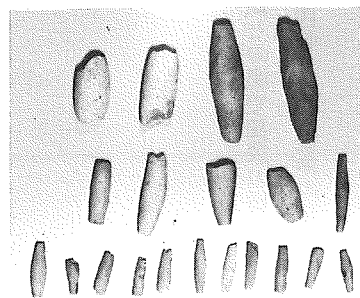
ここには、また、外洋性の魚類であるサワラ、ヒラ、グチなどが、生殖のために廻遊するし、餌を求めて、長期間、滞留するハモ、サヨリ、マボラ、ススキ、クロダイ、ヒラメなどが多い。

定住的な沿岸性魚類はハゼ類、アカグチ、メナダ（ヤスミ）などが非常に多い。

搦の古老の話では、「昔は有明海に恐シカゴト、魚ノオッタ」と聞いていたという。

また、有明海は干満の差が著しく、五・五時一六分で日本一である。干潮時には広大な干潟（地先）が出現し、ここに各種の魚貝類が棲息し、ガタリユウ（干潟漁撈）が営まれている町村が多い。

有明海における沖合漁業は、最深部でも二十数分の沖合で行なわれ、水温は気温に左右され易いので、魚群も気温によって移動する。それに早い潮流を利用して定置網や流し網漁撈などが小規模に営まれている。



東寺井新名から出た「土垂」



出土した牡蛎殻（東寺井）